母権論（連載第十二回）エジプト（八）

ヨハン・ヤーコプ・バッハオーフェン
三浦　淳・桑原　聡　訳

第八六章

以上のような関連を把握すると、カンダケ神話を正しく理解する観点が開示されよう。この神話に見られるのは、高次の男性原理と原初的な女性原理との闘いなのだ。オリエントで両者は出会う。カンダケは特にエジプトやエチオピアで重きをなすような母性権利の代表者であるのに対し、それに対峙するアレクサンドロスは女性的思考法を従える高次の思考法を担う者である。二人が出会うという話が、何らかの実際の出来事をもとにし、それに寓話的な装飾を加えた結果偽カリステネスの書き残したような形になったのかどうか、今となっては突き止めることはできない。それがまったくあり得ないことではないにしても、アレクサンドロスを扱った歴史家の誰一人として、ディオドロスもプルタルコスもクルティウスもアリアノスもユスティヌスも、この点についてわずかの手がかりも残していないからだ。したがって我々はこの物語全体を寓話と考えざるを得ないが、それによって物語の重要性は損なわれるどころか、かえって増すのである。というのもこの神話が寓話であってこそ、何らかの個別的な偶発事を仕立て直したものではなく、大きな一般性を持つ時代現象の表現となるからで、人間は時代現象を個別的な実話の形をとって考え、語り、伝えるものだからである。したがって我々は二つの点を峻別しなくてはならない。物語の形式と、物語の内容もしくは理念をである。形式上、この話は或る特定の出来事のフィクションであって、この出来事は実話風の筋書きを持ち、然るべき状況と多数の登場人物の行動とによって結末へと導かれる。この形式による部分は、創作として、寓話として、メルヒェンとして、或いは自由な想像力の生んだ虚構を他にどう名づけようと構わないが、とにかく捨象し、歴史的真実には入らぬものとして除外しなくてはならない。物語の根幹をなす思想を見るのには、別の尺度が必要なのである。包んでいる衣服が一顧だに値しないにせよ、その中の思想は重要性を失わないからだ。実際個々の出来事にとらわれずに見るならば、物語の根幹をなす思想は特定の地域や個々の人物に縛られない普遍的な歴史性を有しており、大きな広がりを持っているのである。こうした意味でカンダケ神話にもまた高度の歴史的意義が認められる。

アレクサンドロスがアフリカ及びアジアというオリエントの諸国に足を踏み入れることで、様々な宗教、様々な思考法や文明が邂逅した。二つの世界がお互いの視野に入り、双方の特質と根本的な対照性がいっそうはっきりと意識されてくる。こうした対立を招来した者が舞台から姿を消すのが早ければ早いほどに、民族精神にとっては活動の余地が大きく残されるわけであって、あまたの奇蹟物語の形でオリエントと西洋（オクシデント）の闘い、ギリシアの制度

とアジアの制度の闘いについておのれの見解を表現しているのが、こうした民族精神に他ならない。それ故にアレクサンドロスの物語は他のどの物語にもまして出典に関しては事実と虚構の寄せ集めなのであり、したがって史実と創作とを分ける境目がどこにあるのかを決定できる者などいるはずもないのである。英雄が始めた仕事は、民族精神によって受け継がれ発展させられた。この英雄の同時代人やその直後の世代が、アレクサンドロスが通過した地にとってこの英雄が有した意義をどう理解していたか、土着の社会・慣習・制度に対して彼及び彼の行為がいかなる関係にあると考えたのかは、民族精神の作りなした物語を見れば判然としてくるのである。そうした重要な伝承の一つに、アレクサンドロスとカンダケの出会いの物語が含まれる。この物語が成立したのは疑いもなくエジプトであった。まさにエジプトにおいてこそ、女性が高い権利を持つ土着の思考法に対してこの強力な征服者がいかなる関係に立つかという問題が生まれざるを得なかったからだ。この問題を当時の人々がどう考えたかが、この物語に書き残されているのだ。例のエピソードが最初はそれ自体独立した伝承であったことを私は疑わない。偽カリステネスの文書の中でこの伝承が占める位置からして、このことはきわめて明瞭であると思われる。アリストテレスへの書簡とアマゾンの国へ出発する話との間にこの伝承が挿入されているのだが、前後の話との間にはごくわずかな橋渡しの言葉しかなく、つながりがきわめてゆるいのである。偽カリステネス以前にこの話がすでに文書の形で存在したのか、それともただ口承の形でのみ伝わっていたのか、そしてもし前者であるならそれはアレクサンドロスの残した手紙の一通であって、彼はおのが体験を母オリンピアスか恩師アリストテレスに報告するのを常としていたのか――こうした手紙はしばしば言及されているところから見て伝承家の好んで用いた形式であったに相違ないが――(一)、これらは判断しないでおくのがよかろう。肝要なのはこの物語の構図そのものである。この物語を正しく判断する真の、そして唯一正しい基準は物語自体の中にしかない。そうしてみるとことのほか注目に値するのは、この物語が最初から最後まで母権の観点を保持していることであり、カンダケの名のみならずこの名の持つ重要性とこの名の背景にある女性支配制度を表現しているという点なのである。私は以下で特に目立つ若干の点に注意を喚起しておこう。

第八七章

カンダケを夫のない者として、しかし三人の子持ちとして描いているのは、アマゾン的な生の特質に合致するものである。いずれ見る予定であるが、(二)オルコメノスのミニュアイ人の女たちはボイオティアの女流詩人コリンナに「乙女たち」(三)と呼ばれている。彼女らには息子がいるにもかかわらず、である。死んでしまった夫がいたというような記述は全くない。もっともこうした状態が寡婦相続によるものだとする解釈もあり得るのであり、先に(三)我々が示唆したような、寡婦がしばしば女性の権利の代表者として現れるような制度の中では、そうした解釈も可能であろう。同様にシバの女王も夫なしで登場するのであり、彼女がソロモンの子を宿したという伝承はエチオピア土着の思考法に完全に合致している。カンダケのモデルになったセミラミスにしても同様で、彼女は真のアマゾンとして夫を持たず、男性とはヘテイラ的な結びつきを行うだけである。(四)――それに劣らず注目に値するのは、カンダケの息子二人の反目が両者の妻の運命に発してい

るとされている点である。カンダウレスの妻はアレクサンドロス配下の将軍に命を救われ、コラゴスの妻はマケドニア人〔アレクサンドロス〕に一騎打ちによって、父であるインドの将軍ポロスを殺されたのだった。母権制下にあっては前者の善行も後者の凶行も二重の意味を持つ。カンダウレスの妻にあってはカンダケの母たる権利そのものが尊重されているのに対し、コラゴスの妻にあってはカンダケその人が権利の侵害をこうむっている。この観点を偽カリステネスは間違いなく強調している。この観点の内にこそ息子二人の争いの原因があり、カンダケの無為無策の原因もあるからだ。女王は自らの制度によっておのれが解きがたい網の目にからめ取られてしまうのを見たのだった。

母権によって説明し得る第三の点は、盗賊的行為を行うベビュルケス人(五)の王に対する戦いの時間として夜が選ばれたことである。夜襲の選択は偽カリステネスにあっては知恵に発する指示とされているが、これは本来宗教的であった観念を後世の人々に分かりやすく解釈し直したものに過ぎない。夜が女性原理に、昼が男性原理に対応すること、また夜を戦闘時間に選ぶという(六)未開民族の習俗がまさに母性原理のあの宗教的な意味に基づいているということは、すでに先に注意を向けておいた。この二つの観念の結びつきは、太陽崇拝と日の出の到来を待つこととの連関にも見られることで、例えばペルシア人については以下のように報告されている。「父祖の習慣により……日の出になって初めて前進するよう言い伝えられている。〔羅〕」(七)

夜の意味については、私の考えを証明してくれる一節がユリウス・ウァレリウスに残っている。アレクサンドロスとインドの裸行者たちとの対話に次のような箇所があるのだ。(八)「〔アレクサンドロスは〕問う、……夜と昼はどちらが先に作られたと考えられるのかと。彼らはためらうことなく、夜が先だと答えた。なぜならすべて胚胎せらるものは暗闇の中で生の籤を引き、実際に生まれ出たのちに光ある場所へと移るからであると。〔羅〕」(九)アレクサンドロスの質問は続く。「彼はさらに問う、人間においてどちらの側により大きな名誉があると考えられているのかと。左側であるとの答であった。なぜなら太陽も左から出現して右へと進むし、(一〇)同衾も男にあっても女にあっても左側が重視され、女はまず左の乳房の乳(一一)によって養分を与え、神々の像は敬意を持って左肩に載せて運ばれ、王たちは左手をおのれの威厳のしるしとして挙げるから。〔羅〕」(一二)死者と生者のどちらが多数なのかという問いには、次のような答が返ってきた。「たしかに死者の数の方がきわめて多いように思われる。しかし彼らの数は数えるべきではない。というのも彼らは存在することをすでにやめてしまったのだから。目に見えず理性でも捉えられない者より、実際に見えている者の方が多数だと言うのが適切である〔羅〕」(一三)そして最後に「海と大地とどちらが大きいか」との問いに対しては「大地であると彼らは答えた。海は大地の懐に抱かれているからだ、と〔羅〕」(一四)

これらすべての問いには同一の観念が現れている。左側の優位、死者の重要性、「男性＝孕ませる海」より「女性＝大地」に重きが置かれること――これらは夜に根源性を認めるのと同じ観念に由来するのであり、つまり母権の基盤をなす物質的女性的な観念に由来するのである。偽カリステネスは彼の物語のこうした部分においてもまた古い伝承に従っている。これに似た、部分的にはまったく同じ問いが、プルタルコス『英雄伝』「アレクサンドロスの生涯」六四に見られる。死者の生者に対する関係、大地の海に対する関係についての問いに同様の答が与えられており、

左側の意義については触れられず、昼と夜については逆に次のように答えられている。すなわち昼が夜より一日早く存在したと聞いて驚く(一五)というのであるが、夜の優位を予期したのにそうではなかったという気持ちをあらわにした表現である。この問答遊びはあの『知恵の答〔希〕』を想起させるが、これは独立した作品として言及する予定である。(一六)この作品にはカンダケ神話に当てはまったのと同じことが当てはまる。それはアレクサンドロスの戦いが東洋的な観念と西洋的な観念とを引き合わせ、両者の衝突が生じた際に生まれた表現形式に他ならない。

カンダケ神話における個々の特徴をさらに考察していくことにしよう。偽カリステネスはアマゾン祭祀をベビュルケス人の夜の秘密祭(オルギア)と対比させている。(一七)略奪された女の貞操の危機がとりわけ強調されている。「というのもキュプリス〔アフロディーテ〕は生まれつき闇を好むから。〔希〕」(エウリピデス『メレアグロス』(一八))これと、アルノビウス(五・二九)の述べている祭祀の放縦さとを比較してみるなら、そこに現れた宗教上の原型は見誤るべくもなかろう。トロイア及びその祭祀と密接に結びついていたベビュルケス人に、東洋風の極度にヘテイラ的なアフロディーテに対する崇拝が見られることが、完全に実証された。(一九)ベビュルケス人のこの性格をカンダケ神話は保持しているのである。

第八八章

女性支配の思考法にとりわけ特徴的なのは、カンダケが大王〔アレクサンドロス〕の叡知に感嘆して発した言葉である。(二)「アレクサンドロスよ、汝もまた私の息子の数に加わってくれればどんなにか良いことだろう。というのももしカンダケがこのような息子の母でもあると見なされるならば、誰がいったいカンダケが世界全体の女王でもあることを疑うだろうか。〔羅〕」ここでカンダケはアレクサンドロスの母たることを願っているが、彼女はそれによってカンダケという語そのものが意味しているのとまったく同一の観念を示しているのだ。「だが母は誰でもカンダケと呼ばれる。〔希〕」(三)彼女はアレクサンドロスに対してもカンダケ、すなわち王の母であろうと願う。彼の娘、或いは妃と呼ばれることが彼女の密かな願いなのではない。権力は母たることとのみ結びつく。アレクサンドロスの母となれば、彼が獲得した全世界に対する支配権がおのれのものとなるだろう。右で引用したカンダケの言葉によって、ユリウス・ウァレリウスは母たることの意義をはっきりと強調しているのである。息子が自らの手で得たものは、権力の最高の担い手である母のために獲得されたのだ。例えばヘルメスが一杯に満たされた財布を母フォルトゥーナの膝におく彫刻作品がいくつか存在する。クレオパトラが真のイシスとして夫に君臨し、同時にローマ・カピトルの丘から全世界に君臨しようと望むのも同じことである。アントニウスの権力に与る者としてだけではなく、カンダケの有する高次の威厳をもって彼女は世に現れ支配しようとする。そこから、仮にアントニウスが勝利していたら、それが世界にとってどんな意味を持ったかを看取できる。イシスの母性原理が支配権を得ていたであろうし、アレクサンドロスによって潰えさったカンダケの願望が成就していたであろう。カエサルによって父権のアポロン的原理は救われ、カエサルの養子アウグスティヌスは、光の性質を身にまとい、新しい光の時代の出発点に据えられたのであった。

第八九章

以上で述べた点に関して偽カリステネスの記述は、母たることの意味を同じ光のもとに照らし出す歴史的出来事に支えられている。『コンスタンティヌス帝に捧げられたアレクサンドロス遠征記〔羅〕』は次のような記述を含んでいる。「c・二四」「しかしハリカルナッソス〔小アジアの町〕における戦いはアレクサンドロスにとって困難をきわめ、包囲によりどうにかこの町を占領して破壊した。のちに彼は女王に好意を示して町の王権を返還した。彼女から息子と呼ばれることに厳かに同意した。〔羅〕」この書物の著者は知られていないが、歴史的に確かな文献を入手する努力をしたと（c・二）自慢している。ハリカルナッソスに関する彼の報告はまったく正しい。このカリアの町の包囲は、プルタルコスがテュロスの町の包囲と併記しているが、(一)古代人によってしばしば言及されている。女王に対するマケドニア人〔アレクサンドロス〕の態度については、アリアノスが最も詳しく伝えている。(二)「アレクサンドロスはカリア全土の太守権をアダにゆだねた。彼女はヘカトムノスの娘で、カリアの慣習に従って兄ヒドリエウスの妻となっていた。このヒドリエウスは死に際して彼女に政権を委譲した。というのもアジアにあってはセミラミス以来女たちも男を支配することが普通になっていたからである。しかしピクソダロスは彼女を政権の座から追放し、自ら支配権を簒奪した。ピクソダロスの死後、彼の婿であるオロントバテスが（ペルシア人の）王によってカリア統治に送り込まれ、君主となっていた。アダはなおカリアで最も堅固な地の一つアリンダを所有していた。そして彼女はアレクサンドロスのカリア侵入のとき彼を迎え、アリンダを明け渡し、彼を息子として受け入れた。アレクサンドロスは彼女にアリンダを所有させ、息子の称号も拒否しなかった。そしてハリカルナッソスを破壊して残りのカリアをも征服してしまうと、彼は彼女に全土の支配権を与えた。」

ディオドロス一七・二四・二は以下のようである。「アレクサンドロスがカリアに進攻したとき、一人の女性が彼を出迎えた。彼女はアダという名で、その王族はカリア王家に属していた。彼女は彼におのれの先祖が持つ王権について話し、助力を依頼した。そこでアレクサンドロスは彼女をカリアの統治者に任じ、彼女に対する助力により全国民の忠誠をかちえた。実際あらゆる町がただちに彼に使者を送ってきたからである」云々。(三)

ストラボン一四・六五六は次のとおり。「カリア王ヘカトムノスには三人の息子マウソロス、ヒドリエウス、ピクソダロスと、二人の娘があった。姉アルテミシアは長男マウソロスを、妹アダは次男ヒドリエウスを夫とした。統治者のマウソロスは子供のないまま死去し、支配権を妻に遺した。彼女は夫のために先に説明したような墓碑を建てた。(四)夫を失った心痛のあまり彼女が死んでしまうと、ヒドリエウスが王座に就き、彼が病に倒れると妻アダが跡を継いだ。彼女を追放したのがヘカトムノスの末息子ピクソダロスで、彼はペルシアの太守に政権の座に加わるよう命じた。そしてピクソダロスが死ぬとペルシアの太守が政権を独り占めした。この彼こそ、ピクソダロスとカッパドキアの女アプネイスの間の娘である妻アダとともに、ハリカルナッソスの町をアレクサンドロスの包囲に対して防衛した人である。一方ヘカトムノスの娘アダはピクソダロスにより追放されていたが、アレクサンドロスのもとに相談に行き、奪い取られた支配権を再び自分の手に握らせてくれるよう頼んだ。同時に彼女は、全国民が自分の側に付いていると確言して、あらゆる可能な助力を約束した。そし

て自らの居住地であるアリンダを彼に引き渡した。アレクサンドロスは彼女の行為を賞賛し、アダを女王に指名した。町は占領されたが、二重の城塞はまだ持ちこたえていた。この城塞を攻略する仕事がアダに任された。戦いは敵意と大いなる憤怒の念をもって敢行されたので、攻略はほどなく成功した。」

これにさらにプルタルコスの伝える話が加わる。(五)それによれば、女王はアレクサンドロスに料理人と珍味を送り届けたが、突き返され、次のように言付けされた。自分は優れた料理人を持っている、つまり昼食の夜の行軍〔という料理人〕、夕食には乏しい昼食〔という料理人〕を。(六)

あらゆる細部まで一致している右の文献は、カリア王家における相続順位の原則について極めて明瞭なイメージを与えてくれる。その原則は先に〔第五六章〕(七)明らかにしたエジプトのそれと完全に一致する。最高権力は女の手に存する。彼女の兄弟にして夫たる者が王笏を持っていたとしても、彼の死後はその姉妹が自ら統治者として登場する。王位継承権は彼女から娘へと受け継がれ、娘は夫を通して、ということはまず通常は血を分けた兄弟を通して王権を行使し、兄弟がいない場合は夫＝兄弟と見なされる血縁外の男を通して行使する。王位簒奪者ピクソダロスでさえこの原理の例外ではなく、ペルシアの太守をおのれの娘アダとの結婚によって正当化しようとしたのであった。ヘカトムノスの娘〔アダ〕は自らの王権を古きカリアの法として表現したが、アレクサンドロスはこの法に従うことで全国民の忠誠を得たのである。マケドニア人〔アレクサンドロス〕はこうして憎むべきペルシア人支配に対する敵対者となるだけではなく、古き土着の法秩序を再興する者ともなったのだった。(八)アレクサンドロスに母として振る舞うアダの態度はこの法秩序と密接に結びついている。女の持つ高次の権利はおのれの母としての性質に存するのであり、母たることを通して女は大地という太母の代理人を務める。女は妻であれ娘であれ、威厳と法的地位に従うなら母なのであり、母であるが故に権力の源にしてその至高の担い手であり、夫を失った後は自ら権力を行使もするのである。

アルテミシアという名はカリア史にあって大いなる役割を演じている。有名なのは勇気と決断と優れた洞察力という三拍子揃った女王であって、彼女はアテナイに向けて報復目的で進軍したクセルクセスに自らの意志で随行したが、サラミスの海戦を思いとどまるよう説得し、アミニアスの追撃を逃れ、王の子供たちを無事エペソスへ送り届けた。(九)このアルテミシアもまた夫の死後、そして息子が未成年の間、支配権を行使した。彼女は父方はハリカルナッソス、母方はクレタの出身だった。ここに我々はカリアの母権がクレタのそれと結びついているのを再度見るのだが、そもそもカリア人自身がもともとクレタを所有していたのだ。(一〇)アテナイ人は彼女の首に一万ドラクマの賞金をかけた。「アテナイ人としては、女の身でアテナイに兵を進めるということに憤懣を禁じ得なかったのである〔希〕」(一一)女性的アマゾン精神に敵対するアテナイの姿勢がここでも際だっていることに注意してもらいたい。アリアノスの証言によれば（七・一三・五以下）、戦死者への追悼演説をするあらゆる人々が特にアテナイ人のアマゾンに対する戦いにも言及したという。(一二)アマゾンに対する戦いはペルシア人に対する戦いに劣らず具体的に描写されており、この両敵対者はダリウスの花瓶にあっては一緒に描かれている。(一三)したがってクセルクセスとともに来襲したアルテミシアは女に対する古き戦いを想起させ、それ故にアテナイの愛国心をいたく刺激したのではなかったか。カリアの女王たちが持つアマゾン的な

性格と関連づけると、大英博物館に移送された霊廟のアマゾン描写は新たな意味を獲得する。(一四)

アルテミシアと並んでアダという名もしばしば登場する。したがって彼女の名はアルテミシア同様（トラキア人の「女王アルテミス」を考えよ）、母たることの高貴さそのものを示す宗教的表現に他ならない。アダ Ada はリュキアにおいて母を意味するラダ Lada に由来するようで、多くの発音例に見られるものの一つらしい。すなわち、特にカリア人と極めて近い関係にある(一五)イオニア人が語頭のラムダ〔λ〕を省いて発音する場合（アクネー〔綿毛〕－ラクネー〔羊毛〕、アピュッソー〔汲む〕－ラピュッソー〔貪り飲む〕、エイボー〔したたり落ちる〕－レイボー〔流れ出る〕、アペーネー〔四輪車〕－ランペーネー〔幌付き車〕）と同じである。それ故、意味上アダはカンダケと同じであり、アレクサンドロスの側から母の称号を付与したのは語の意味と完全に合致するものである。(一六)アダーラダの例に連なるのは、カリア王の名ゲラス Gelas である。(一七)Gは語幹の las に接頭辞として付いている。(一八)アイスキュロスやプルタルコス(一九)に登場するペラスゴイ王ゲラノル Gelanor もゲラスと同根であり、おそらくはスコットランド語の Clan〔一族〕もそうであろう。(二〇)

第九〇章

こうして我々は、アレクサンドロスとアダの出会い、及び彼とカンダケとの出会いがいかに正確な対応関係にあるかを知ることとなった。前者は史実であり後者はフィクションである。だが後者は西南アジアの民族の法として前者の中に現れている思考法に依っている。この物語全体を支配しているのは女性支配的な観念だが、カンダケ神話の中でもそれが一番明瞭に現れているのは、驚いた女王がアレクサンドロスを自分の息子としたいと願う箇所である。そうすればアレクサンドロスが獲得した帝国全土は彼女の支配下におかれるからだ。ちょうどアダがアレクサンドロスの母となって彼の征服したカリアを得たように。アダをめぐる史実とカンダケ神話との並行関係はいくつかの箇所では驚くほどはっきりしている。クルティウスは支配権を未亡人である王妃に任せるしきたりはセミラミスにさかのぼるとしている。この女王以来、女性支配は一般的になったというのである。カンダケがセミラミス女王の曾孫であり、王都自体がセミラミスの名によって命名されたとする記述も同じ観念に基づいている。それ故この点でもカンダケ神話は、西南アジアにあって多数の記念碑により永遠化されているアマゾン的な女王〔セミラミス〕の著名な名とあらゆる女性支配とを歴史的関連のもとに見ようとするあまねく広まった思考法の表現となっているのである。(二)息子の数においてもアダとカンダケは一致しているが、仮に三という数の典型的性格故にそれが些細なことと思われようとも、カンダケの三人の息子のうち二人だけが重要人物として登場していること、一人はアレクサンドロスを、もう一人はポロスを支持していること、そしてカンダケ神話にあっても姉妹への言及が残されていることに注目しなくてはならない。

ユリウス・ウァレリウスは次のように述べている。「（アレクサンドロスは）カンダウレスの妹の宴会で時を過ごした。〔羅〕」(二)カンダウレスの妹は同時にその妻でもあった。エジプトの観念に従うならここには兄妹の結婚が現れているのであって、それはまたカリア王族にも見られたものでもある。カンダウレスの妻の出自について神話はいかなる記述も残してはいないが、一方コラゴ

スの妻の父はポロスだとされている。ここにすでに、カンダウレスの妻が非血縁者ではないという暗示があるのだとすると、このことは写本B(三)に、カンダケは救われたカンダウレスの妻に「娘よ〔希〕」と呼びかけたとの記載があることからも証明される。「息子カンダウレスよ、そして娘ハルピュッサよ、もしお前たちが折良くアレクサンドロスの軍隊を見つけていなければ、私はお前たちと再会することはなかったろうし、お前も妻に再会することはなかっただろう。〔希〕」「ハルピュッサ〔希〕」という名は写本Cに見られる。写本Bでは「さらわれたアルプーサ〔希〕」となっており、写本Aでは「マテルサ〔希〕」である。ユリウス・ウァレリウス〔三・六三＝三・四〇〕では「とても愛らしい義理の娘〔羅〕」となっている。こうした異稿全体を見る限り、私としては元の名はマルピアかマルペッサで、それが彼女のたどった運命との関連からハルパゲイサ〔さらわれた〕に変形したのだと考える。このことが少なからず意味を持つのは、さらわれたカンダケの娘がイーダスにより誘拐されたマルペッサ――エウエノスとアルキッペの娘――と同一視されていることになるが故である。ベブリュキア人がカンダケ神話の中に登場する理由もここから説明できるのだ。ベブリュキア人は、のちのケルト人同様、ピレネー山脈から西南アジアへと到達した可能性があるが、トロイアのイダ山脈へと追いやられた。(四)それだけでなくエペソスやマグネシアやビチュニアへも追いやられた。(五)力でアポロンをしのぐイーダスがかつてマルペッサを奪ったように、今度はカンダケの同名の娘がベブリュキア人の王エウアグリデスに力ずくでさらわれるのである。ツェッツェス（『リュコプロン』一三〇五）はベブリュキア人をミュシア人と同一視しているが、これによって我々はミュシア人と血縁関係にあるカリア人へと再び導かれる。(六)

しかしまた、カンダケの娘がさらわれた事件にはアマゾンが絡んでくるが故に、この出来事は根拠のない作り話とは言えなくなるのだ。偽カリステネスによれば、この誘拐が行われたのは、アマゾンが毎年催す祭典の式場にカンダウレスとマルペッサが向かう途中のことであった。アマゾンとの親類関係は、エウエノスの娘マルペッサにも見られる。というのも彼女は母エウイッペを通してオイノマオスにさかのぼる家系であり、父から断罪されて男なしのアマゾン的生き方をするようになったからだ。テゲア神話により最も勇敢な女にして「女の饗宴を受けるアレース〔希〕」の祭祀と最も結びつきの強い存在とされるマルペッサもまた極めてアマゾン的であった。(七)マルペッサという名前自体が、アマゾンを娘とするとされるアレース＝マルス神に強く結びついているのであって、カンダケの娘がアルテミスに従う戦闘的な女たち〔アマゾン〕と結びつくのはあらゆる点から見て当然ということになる。マルペッサはしかしイーダスの妻としてだけではなく、メレアグロスの妻としても(八)現れるから、女性支配のアイトリアの地にまで達しているし、また彼女の娘クレオパトラを通してエジプトをも想起させるのである。一方イーダスの方もミュシアの地に導かれた。彼はミュシア王テウトラスから国を奪おうとした時、テレポスとパルテノパイオスによりうち負かされている。(九)この言い伝えにおいてはベブリュキア人のミュシア、そしてカリアとも血縁関係にあるミュシア(一〇)は、またしても女性支配の地として現れる。なぜならパルテノマイオスという名はアタランテーの息子同様、処女の息子という意味であるし、テレポスについては、彼が母を探してミュシアにやってきたということが強調されているからだ。

以上のような特徴を綜合すると明らかになるのは、カンダケ神

話の少なからぬ部分が西南アジアのマルペッサ伝承――エウエノスの娘たるマルペッサ――からとられたものだということ、二人のマルペッサには内的な連関が認められるが、その連関は両者の女性支配的な地位にこそ存するのだということである。それだけに一層興味深いのは、カリアの王家と同じくイーダス神話にあっても妻の夫に対する忠実さと愛情が際だって強調されているところだ。(一二)ゼウスから夫を選ぶ権利を認められてマルペッサはアポロンを退けイーダスを選んだのだが、やがてアポロンにさらわれたがために、アルキュオネーがケーウクスのために泣いたように、夫との別離故に泣いたのであって、そのために両親からアルキュオネー〔カワセミの意〕という名を授けられたのである。これはアルテミシアが同様に得た名でもあった。パウサニアス(四・二・七)によれば、アルテミシアは激しい苦痛の中で自らの命を絶ったという。この神話はストラボンがアルテミシアの死について述べているところと(一二)一致しており、またイオニア人征服者たちに対するカリア人女性の態度(一三)とも軌を一にしているが、こうした一致は伝承がそれらの点においても実際の社会生活とつながっていることを示しており、テゲアのマルペッサの例にも見て取れるように、夫から妻に与えられる財産が重きをなすことに新しい意味を付与するものである。このことと結びつけるなら、カリアの弔い女に新しい光が当てられる。(一四)カリアの弔い音楽が短調であるのは女性優位と密接に関連している。カリアの雄弁術の性格も同様である。(一五)以上のような女性重視を見て明らかなのは、マケドニア人たちにより救われたマルペッサへの言及が彼女を救い出した者の栄誉を祝した宴にあっては欠かせないことであって、特に戦士たちの酒宴にはカリアの女たちが同席した事実が明瞭に証言されているだけになおさらそうなのである。